

「能登の愛菜果」の畑を
視察する関係者
＝穴水町大郷

穴水・葉たばこ廃作農家

転作野菜生産 3年で倍以上

関西のスーパーで好評



葉たばこを廃作した穴水町の農家をつくるグループ「能登の愛菜果」は今年、ジャガイモとカボチャの作付面積を昨年の1・5倍に広げる。出荷先の関西圏の大型スーパーなどから好評で、昨年は生産が追いつかなかった。2012年の出荷開始から3年目で2倍以上となり、葉たばこ農家の転作成功例として関係者の期待を集めている。

グループは、カット野菜製造のアスコ(立山町)が転作支援と販路開拓への協力を申し出したことをきっかけに発足した。阪南青果(大阪府泉佐野市)に試験出荷したところ、賞の良さが評判となり、関西圏のスーパーで、プライベートブランドとして取り扱われている。

今年3農家が加わり9農家で生産に取り組み。作付面積は12年の6・6畝から14・5畝に広げ、ジャガイモとカボチャ計2万5千本の出荷を見込んでいる。

2日は、日本たばこ産業(JT)の前副社長で、た

ば総合研究センターの志水雅一理事長や阪南青果、アスコの関係者4人が、穴水町大郷にある畑を視察した。志水理事長は「葉たばこを廃作した農家が、これほど大規模に転作野菜を栽培している例は珍しい」と驚いた。

グループでは今年、タマネギやダイコンの栽培にも取り組み、滝谷政博代表は「好評の野菜を安定供給できるように栽培に励みたい」と話した。



大阪の阪南青果 穴水で畑を視察

従業員研修で30人

穴水町内で栽培された野菜を出荷している阪南青果(大阪府泉佐野市)は29日、従業員研修の一環で、同町大郷の畑を視察し、従業員ら約30人が世界農業遺産「能登の里山里海」の土壌に触れた。

畑では、葉たばこを廃作した農家をつくるグループ「能登の愛菜果」が野菜を栽培しており、同社は、グループが栽培したジャガイモとカボチャを、関西圏の大型スーパーなどへ卸している。

同社の笹野敏和会長は「能登の赤土で育った野菜は、関西圏の消費者に好まれている。生産者のやる気を感じ、将来性を感じる」と話した。